

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第九主日(7/25)礼拝

「私たちはどこにいるのか」

ルカ福音書第23章13節から25節

【聖書】

ルカによる福音書23:13 ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、14 言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。15 ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。16 だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」18 しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。19 このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。21 しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。22 ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」23 ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。24 そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。25 そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。

1 映画「パッション」

聖書を読むとき、「ああ、ここに、あそこに、自分がいる」と感じる事が度々あります。皆さんはどうでしょうか。のっけから私事で恐縮ですが、私は「パッション」という映画を見た時、最初にそう思いました。2004年のアメリカ映画で、イエス・キリストのエルサレムでの最後の数日間を、描いたものです。拷問や十字架の様子がとてもリアルだった為に、アメリカでは失神者が続出して話題となりました。また、人殺しをして逃亡していた犯人がこの映画を見て回心し、警察に出頭した、というような事もあったようです。苦しみを受ける主イエス・キリストを中心に様々な人物が描かれており、そのあちらこちらに自分がいるように思えました。今から思えば、この映画を見て、主の受難物語と復活は、「ああ、自分の物語だ、その中に自分がいる」と感じたのだと分かります。だから、映画を見終わった後、教会に行って洗礼を受けねば、と考えるようになったのでしょうか。その「パッショ

ン」の中でも、私が最も「そこに自分がいる」と感じたのが、主イエスの裁判の場面です。今回、主イエスが判決を受ける場面を語る聖書に改めて耳を傾けてみて、17年前と同じ場所に自分を見出す事や、そことは全く別の場所に新たな自分を見出す、という発見もありました。今朝は、しばらくの間、主イエスが十字架刑の判決を受ける場面に共に心を集めて、耳を傾けていきたいと思えます。

2 ピラト

ユダヤ人の最高法院で、祭司長や長老達に「神の子と名乗り、神を冒瀆した者」と糾弾されたイエスは、ローマ総督ポンティオ・ピラトのもとに連行されます。ユダヤの権力者達が、ローマの力を利用してイエスを十字架刑で殺そうと企んでの事です。その為に、イエスが王と名乗り民衆を煽動し、皇帝に税金を収めることを妨げ、反乱を起こさせようとしている、という偽りの訴えをします。ピラトはイエスを取り調べますが、そのような事実は出てきません。彼を釈放しようとはしますが、祭司長や長老達は引き下がらない。彼らの言葉から、イエスがガリラヤ人である事を知ったピラトは、ガリラヤ領主ヘロデのもとにイエスを送ります。ヘロデは、兵士達と一緒にイエスを鞭りものにし、嘲笑して、ピラトのもとに送り返す、そこから今日の場面です。

ヘロデからイエスを送り返されたピラト、自分で決着をつけねばなりません。ユダヤ人の権力者、祭司長や最高法院の議員達、そして民衆をも裁きの場所に呼び集めました。公開裁判で主イエスを裁こうとしたのです。ピラトの思いの中には、つい昨日まで、主イエスの教えを喜んで聞いていた民衆が主の味方をしてくれるのではないか、民衆がユダヤ人指導者達の死刑にしようという思いを変える事ができるのではないかと目論見があったのかもかもしれません。ピラトは、ユダヤ人指導者や民衆の前で、やつれ果てた主イエスを示し、「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。」と改めて無罪を宣告します。

ですが、彼は自分の確信に徹する事ができませんでした。「だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」ピラトは、現代風に言えば、「空気を讀んだ」のだと思います。彼が思ったほどに民衆は、主イエスを支持していない、寧ろ、祭司長や律法学者達に説得されたのか、イエスに対して怒っている、ピラト

が無罪宣告しても歓声が上がるどころか不穏な空気が流れているのではないか、「これはまずい、このままでは騒乱が起こるかもしれない。トラブルが帝国上層部の耳に入って総督をやめさせられるかもしれない。」そう考えたからでしょう、ピラトは唐突に「鞭打った上で釈放」と言い出します。イエスの無罪を確信しているなら、法律に従ってそのまま釈放すべきなのです。ピラトは、法律を歪めてでもこの場を切り抜けようとしてしました。

実はルカは、そんなピラトの中途半端な姿を描くのに、面白い言葉を使っています。「鞭打つ」と訳されている言葉です。この言葉は、親がいたずらをした子供のお仕置きをする時に使われたようです。いたずらをした子供のお尻をパンパンと叩いて、二度と悪いことをしてはダメだよ、と言うような時に使われる言葉。昨今は体罰は虐待ととる方も多いかもかもしれませんが、少し前まで普通に行われていました。ピラトがイエスのお尻を叩くという、もう二度と悪いことをするな、とローマ総督であるわたしが懲らしめて言って聞かせて解放するのだから、お前たちは黙って受け入れたらどうか、とピラトは言うのです。ピラトは主イエスが神の独り子だとは分かりもせず滑稽きわまりないこと。ですが、私たちもピラトのように真実が何かも分からぬままに、その場の状況に流されて、些細な事だから、と不正を働きたいという誘惑にかられる、と言う事は案外多いのではないのでしょうか。ああ、ここに私がいる、と思わされます。

3 十字架につけろ！と叫ぶ民衆

ですが、人々は、却って一斉に叫びをあげます。「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」「その男を殺せ」直訳すれば、「その男を消しされ」、イエスの存在じたいを抹殺しろ、という恐ろしい言葉です。人々は続いて「イエスの代わりにバラバを釈放しろ」と迫ります。過越祭の期間中、ローマ総督は、エルサレム市民が望む囚人一人に恩赦を与えて解放するのが習慣となっていました。しかし、このバラバ、マタイの福音書ではバラバ・イエスという名前を持つ男は、エルサレムで暴動を起こし人を殺した廉で逮捕された者。極刑の十字架に処せられる為に捕えられています。彼は植民地支配されている祖国イスラエルの独立を求めてローマ帝国に反乱を企てたのではないかとされています。

しかし、何故、人々は主イエスではなくて、バラバの釈放を求めたのでしょうか。色々な説明がされてきました。その一つに、「人々は分かりやすい政治的な革命を好んだ」というものがあります。バラバの革命はわかりやすく力に訴え、社会を変えようとするもの。しかし、主イエスは違います。主

は神と人間一人一人との結びつきを強め、御神が私たち一人一人を変えてくださることで御神の支配を広げていく、というやり方をとられた。主のやり方は、目につきませんし、遠回りです。だから、わかりにくい。バラバのほうが無単純で手っ取り早く分かりやすい。いつの時代も私達は分かりやすい方を選びます。この時も人々は主イエスよりもバラバのほうを選んだ、というのです。私もそうではないかと思ひます。

しかし、最初は無由を求める革命家であつても、革命が成功して権力を握れば、今度は人々の自由を抹殺し始めます。それは、どの革命にも見られる傾向、私たち人間が飽きもせずには繰り返してきた歴史。旧約聖書の歴史書にも書かれています。聖書はそんな人の愚かさをよく知っていた。それは、彼の名前を見れば分かります。バラバ・イエスとは、「バル・アッバ、イエス」。「父親の息子・イエス」という意味だと言われています。民衆は、目の前にいる「神の御子」イエスを捨て去り、人間の歴史の象徴とも言える「人間の息子」イエスを選ぼうとしている、と言いたいようです。

ピラトは謀反人を釈放するのは避けたいと思つたのか、イエスの釈放を呼びかけます。ですが、人々は「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けるばかり。その叫びは、ひどく怖ろしい声であり、「人々は、『十字架につけろ、十字架につけろ』と喚き続けた」と訳している聖書があります。それにしても、どうして、昨日まで主イエスの教えを喜んで聞いていた人々、善意の人々がこうも主を憎む者へと変わるのでしょうか？ いったい、主イエスは、この民に何をしたというのでしょうか。

故・藤井雅博兄がいつも賛美していた讚美歌 121 番「まぶねの中に」。その歌詞にあるように、主イエスは、食事をとることさえ忘れるほどに自分の事は後回しにし、社会で虐げられた人々を訪ね、友人のいない人の友となり、貧しき事の悲しみや生きる事の悩みに寄り添ってきた。様々な病を癒し、神さまの身許に人々を連れ帰った。神のご支配がどのようなものであるかを教えてきた。人々は喜んで聞いた。主イエスが癒して下さった病人を抱えた家庭に、あるいはもう死んでしまった筈の娘や息子を甦らせていただいた家に、大きな喜びがありました。かつて、イエスさまのまわりには喜びと好意が満ち溢れており、笑い声が響いていました。

ですが、おそらく人々の善意と笑い声に囲まれていた時、主イエスは既にその時に、誰の人々の手でもなく、他ならぬ主が癒し助け導いたこれらの人々の手で、自分が殺されることを知っておられたのではないか、と言った牧師がいます。私もそう思ひます。恐るべきこと。勿論、人々の背後には、煽動者がいました。この民衆よりももっと悪い奴がいて陰で糸をひいた、と言えなくはありません。ですが、ルカ福音書は煽動の事実を表立って語って

いません。民衆が喚いた、民衆が叫んだ、そしてその喚き声が勝った、ついにピラトは屈服し、民衆の意のままにすると言い出した、と語るのみです。

主イエスを十字架刑を決定づけたのは、神を知らない者達ではなく、神を知っている者達なのです。その事をルカははっきりと語っています。14節、ピラトが「民衆を呼び集めた」とありますが、この「民衆」という単語は、烏合の衆ではなく、「神の民」のニュアンスが強い言葉であり、使徒言行録では、「教会」の意味で使われている言葉です。神の民が神の独り子の存在を邪魔だと叫び、抹殺しようとした。なぜでしょうか。

ここには実に厳しい人間の罪が描かれています。主イエスが生きて、身を持って示してくださった神の愛が邪魔になったからです。「もうやめろ、“敵を愛せ”とか“裁くな”とか、そんな話しは聞きたくもない、神の独り子など要らぬ、神など要らぬ、消えてしまえ」人間の心が、どこかでそう叫び始めたのです。しかも民衆は、このイエスを十字架につけろと叫ぶ。ユダヤ人は、ユダヤ人が十字架刑を受ける事を望みません。異教徒ローマ人が決めた死刑だからです。ユダヤ人の同胞を死刑にする時は石打ちの刑を望むのです。教会最初の殉教者と言われるステファノも、石を持って殺されます、しかし、民衆はここで「十字架につけろ」と叫びました。イエスはここでユダヤ人、つまり「神の民」としての死さえも許されない。人々は、イエスが神の子であるなら、そのような神は要らない、とここで叫んだ。人間が自分達に都合の悪い神を拒否し、都合のよい神を造り出そうする。これもまた、旧約聖書に書かれていること、人間が繰り返し犯して来た罪。「神の御子、つまり神など要らない、自分たちで好きにやりたい」信仰者の心にも巣くう闇が叫びをあげています。ですから、人々は、まさに自分達の罪の証人として、叫びをあげているのです。人の罪の証でした。何故なら、この裁きは、ピラトの法廷でも、ユダヤ人権力者達が裁く場所でもなく、神がお審きになる場所であったからです。

4 神の裁き

しかし、神が裁いているのは、自分達の言葉と行いによって、自分たちの罪を証してしまったピラトやユダヤ権力者、バラバ、エルサレムの人々ではありません。唯一、何の罪も立証されなかったイエスを、神は裁こうとされています。なんという不正義でしょうか、不法でしょうか。神は義なる神ではないのか？ どうして罪もない主イエスをお裁きになるのか？

不思議なことです。しかし、そうしなければ、神の愛と義は立てられなかった。私たち人間では、神の審きに耐えられず、みな滅ぼされるしかない、

全滅するしかない。他者を愛し求めるといふ神の御心は頓挫するしかありません。一方で、人の罪を見逃せば神の義も立たない。だからこそ、父なる神は、子なる神を完全に人間としてこの地上に、マリヤの胎に受肉させ、人々の代表者なる真の王とされました。そして、今、全人類の代表なる真の王として、イエス様を十字架に滅ぼそうとされています。神は、そうしてイエスを裁く場所においてこそ、ご自身の愛と義を地上に実現させようとしておられます。

この主イエスが死刑判決を受ける場面を想う時、神の裁きは、愛に於いてどこまでも正しい裁きなのだ、と思わされます。人の裁きが、愛に於いて正しくあることは難しく、今日の場面のように、自分たちの勝手な正義で人を裁き、怒りや憎しみをうむ裁きであることが多いものです。しかし、神が私どもを裁くとき、愛に根ざす正しきで裁かれます。また、神の愛は、正義に根ざすからこそ、どこか必ず自己中心的に歪められてしまいます人間の愛とは、決定的に異なるのです。神の審きは義にも愛にも徹底しています。

ですから、主イエスの救いに一人の例外もないのです、主はすべての人の代表であり、身代わりだからです。暴動を起こし人を殺したバラバの身代わりにもなられました。「どちらを許すか、イエスか、バラバか。」ピラトにそう問われて群衆はバラバの釈放を求めます。その時、主イエスご自身は何と考えておられたか。「これは不当な裁きだ、自分が助けられて、このバラバこそ殺されるべき者だ」と思わっておられたのでしょうか？決してそうではないでしょう。主イエスは、人間の罪の深さを誰よりも恐れ、誰よりも悲しんでおられながらも、バラバではなく自分が死に定められた事を喜んで、その身に引き受けられたのではないのでしょうか。

あのオリブ山の麓のゲツセマネの園で、父なる神が与えると言われた苦い杯を、主は今、静かに飲み干そうとされています。こうしてしか、父の御心がこの地上に実現しない事を、主イエスは理不尽な仕打ちの中で受け入れられた。まことの王として玉座に坐ろうとされている。まことの王として、人々の罪の只中に立とうとされている。主が立って下さらなければ、私たちの救いの道は始まらないからです。

5 私たちはどこにいるのか。

ここまで、主イエスが十字架の判決を受ける場面を見てきて、私たちは様々な場所に自分たちの姿を見出してきました。正義に徹する事ができず大声に負けるポンティオ・ピラト、自分たちの権利や名誉や富を守る為に主を殺そうとするユダヤの権力者達、自分の正義をふりかざし人を殺し暴動を起

こして捕まえられたバラバと支持する民衆、そして主イエスを殺せ！と喚き叫ぶ人々。しかし、イエス・キリストを知り、イエスの十字架は自分の為であったと告白し洗礼を受けた者達が立つべき所は、そのどこでもありません。私たちがここまで見出してきたのは、いずれも古い自分達の姿なのです。罪の中に留まり続ける古い命を打ち滅ぼす為に、主イエスは十字架に架かられたのですから。私たちは、過去の自分達の姿、陽炎のような姿をそこに見ているに過ぎないのです。

そして、キリスト・イエスによって新たにされた私たちが見出されるのは、ただ主イエスの傍らです。何故なら、私たちのうちには、天の御神を「アッバ、父よ」と呼ぶ御子イエス・キリストの霊が与えられているからです。それはつまりどういう事かという、私たちが洗礼を受けるとは、イエス・キリストと共に十字架にかかり死ぬという事、そして、三日目の甦りの命、イエス・キリストの命に新しく生きる事なのです。だから私たちが生きる場所は、主イエス・キリストがおられる場所以外にはありません。私たちは既にその場所に生かされているのです。そうだと気づかされたとき、イエス・キリストと共に生きる私たちの物語は、また新たに始まります。そして、教会の物語も動き始めます。

「私たちは自分たちを主人として生きたいんだ、自分たちを神として行きたいんだ。この神の子が邪魔なんだ、殺せ、殺せ」そのような虚ろな叫びが、今なお響いている世にあっても、その世の為に死んでくださった主イエスの物語を弟子として共に生きていきたい、と切に願う次第であります。